

## 県東部海域の魚類増殖場における魚介類の分布状況

水産研究所では、県東部海域に整備された魚類増殖場の造成効果を把握するため、平成26年度から人工魚礁(写真1)や潜堤(割石を堤防状に組み合わせ、海面下に設置したもの)に生息している魚介類の分布状況等を調査しています。

人工魚礁の周囲を長さ21m、高さ3mの刺網で1昼夜取り囲み漁獲し、魚礁内に残存した魚介類を潜水目視で計数しました。また、潜堤でも同様に1昼夜設置し、漁獲された魚介類を計数しました。

人工魚礁と潜堤における魚介類の月別生息個体数を図1に示しました。人工魚礁における生息密度は25~46尾/基と比較的季節変化が少なく、魚種別にみるとカサゴが年間を通じ最も密度が高く13~28尾、その他にメバルが春、秋季に10~14尾、クロダイが冬季に5~23尾と高密度に生息していました(写真2)。一方、潜堤における生息密度は0.24~0.52尾/m<sup>2</sup>で、カサゴが0.08~0.2尾で最も高く、メバルが秋~冬季に0.02~0.16尾、その他にタケノコメバル、ボラ、イシガニ等が多く生息していました。高級魚であるキジハタ、オニオコゼも両施設で春~夏季に確認されました。また、成熟の進んだ抱卵個体も各魚種で確認され、再生産の場として利用されているものと推測されました。

今後、これらの調査結果を基に、増殖場の造成効果を魚種別に検討したいと考えています。

(開発利用室：佐藤)



写真1 人工魚礁(3.4×3.4×2.2m, 20.3空m<sup>3</sup>)



写真2 人工魚礁で漁獲された魚介類

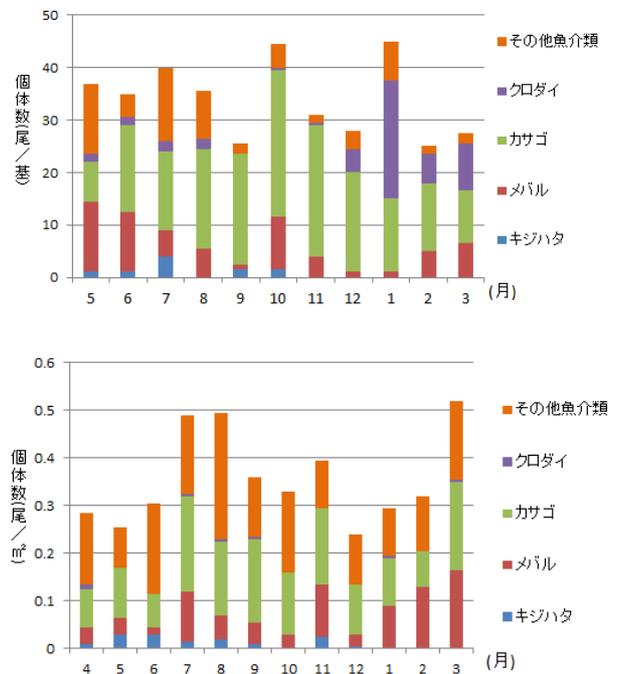


図1 人工魚礁(上)、潜堤(下)における月別魚種別生息個体数